

凡例

一、本書は、Jules Micheler : Histoire de France の中世編 (Le Moyen Age) の全訳を六巻に分けたなかの第三巻である。カペー王朝の聖王ルイなきあと、弟のシャルル・ダンジュエーによって、その《聖なるキリスト教世界》が、どのように瓦解し、とりわけ孫のフィリップ(四世)美男王、さらにヴァロワ王朝になつて、お人好しのジャン二世、その息子の賢王シャルル五世のもと世俗的・近世的国家に変質していったかが明らかにされている。

一、本巻冒頭に収めた「一八三七年の序文」は、ミシュレが一八三七年に刊行した『フランス史』第三巻のために執筆された序文で、その第三巻の内容は本訳書と同じ十四世紀を扱った第五部と第六部である。

一、第〇部、第〇章といった章立てはミシュレの原書のとおりであるが、それぞれのタイトルは訳者が付けた。本文中、「原注」として挿入されているのは、フラマリオン社の全集に附されている注である。当全集には詳細な注が施されているが、本書では、本文を理解する上でとくに必要と思われるものを選んで「原注」として転用させていただいた。

一、人名、地名の表記については第一巻、第二巻の凡例で断つたように現地主義を基本としたが、フランス地方のそれについては、中世のこの時代はフランス王が宗主として支配した時代であり、フランス語式表記を用い、時に応じてカッコしてフラマン語式表記を附した。

一、なお、本書の記述のなかには、一七〇七年のイングランド王国とスコットランド王国の合併以前であるにもかかわらず、「イギリス」と「イングランド」が混在する形になってしまったが、フランスを侵略したイングランド軍はウェールズ人やアイルランド人も含んでいたため、基本的には「イギリス」あるいは「英軍」とし、そのイギリスのなかでウェールズやアイルランド、さらにスコットランドとイングランドとが対峙している場合は「イングランド」という呼称を用いた。

目次

一八三七年の序文 2

第五部 近世的国家の形成 5

第一章 シチリアの晩禱 6

第二章 フィリップ美男王と法王ボニファティウス八世 31

第三章 王室財政とテンブル騎士団 97

第四章 テンブル騎士団の壊滅（一三〇七〜一三二四年） 130

第五章 フィリップ美男王とその三人の息子 173

第六部 ヴァロワ王朝 219

第一章 フィリップ六世（一三二八〜一三四九年） 220

第二章 ジャン二世とボワティエの戦い 287

第三章 ジャックリーの乱 305

第四章 シャルル五世とイギリス人の駆逐（一三六四〜一三八〇年） 363

訳者あとがき 430

人名索引 442

フランス史「中世」Ⅲ

一八三七年の序文

ジュール・ミシュレ

十四世紀はフランスの国家が形成された時期である。三部会 (Les États Généraux)、高等法院 (Parlement) をはじめとしてフランスの主要な国家機構のすべてが始まるか、または、軌道に乗るのが、この十四世紀である。《ブルジョワジー》はエティエンヌ・マルセルの革命から、《農民》はジャックリーの乱から現れ、《フランス》自身、イギリス人との戦争のなかから姿を現す。《よきフランス語》も、十四世紀に始まる。

これまでは、フランスは《フランス》であるよりは《キリスト教世界》であり、ほかのあらゆる国と同様、封建制とキリスト教会によって覆われ、その巨大な影のなかに曖昧なまま溶け込んだようになっていた。それが夜明けとともに、自らを垣間見せはじめたのである。そして、中世の詩的な闇から抜け出すや、民衆的・散文的・批判的精神、反象徴主義といった、こんにち見られるものになったのだ。

第五部 近世的国家の形成

第一章 シチリアの晩禱

聖ルイ王の息子、フィリップ二世豪胆王（在位1270-1285）は、チュニスで悲しくも挫折した十字軍から帰ると、サン＝ドニ大修道院の地下廟堂に五つの柩を安置した。彼自身、身体が弱く、憔悴していたが、その家族の資産のほとんどすべてを相続した。弟ジャン・トリスタンの死によって彼のものになったヴァロワはいうまでもなく、叔父のアルフォンスから南フランスの王国全体（ポワトゥー、オーヴェルニュ、トゥールーズ、ルエルグ、アルピジョワ、ケルシー、アジェノワ、コンタ）を受け継いだうえ、息子（フィリップ四世美男王）をナヴァール王兼シャンパーニュ伯の一人娘と結婚させて、その豊かな領地を手に入れた。（訳注・ケルシーはタルン＝エ＝ガロンヌ県、アジェノワはロット＝エ＝ガロンヌ県、コンタはコンタ＝ヴェネサン。）

トゥールーズとナヴァールを足場に確保したこの強国が次に眼差しを向けたのは、南フランスとイタリア、イスパニアであった。しかし、この聖ルイの息子は国王として全能ではあったが、フランス王家の真の家長ではなかった。この一家の実質的頭目は、聖ルイの弟であるシャルル・ダン

ジューであった。この時代のフランスの歴史は、ナポリとシチリアに王として君臨したシャルル・ダンジューの歴史であり、彼の甥であるフィリップ三世の歴史は、いわば付随物でしかない。

シャルルは信じがたいほどの資産を運用し、濫費した。フランス王の弟にしてプロヴァンス伯、ナポリ王、シチリア王、エルサレム王として、王より以上に法王を威圧した。「わしに足りないのは何か、だと？　神の怒り以外は、なにも不足してはおらん」と言つたとされるピサの暴君、ウゴリーノ〔訳注・一二八九年に亡くなった権謀術数に長けた野心家。本名はゲラルデスカ〕の有名な言葉は、彼にこそ当てはめることができた。彼が兄の信仰深い単純さに乗じてその十字軍の行く先を自分の目的とする地へねじ曲げ、アフリカに上陸させてチュニスを攻めさせたことは、すでに見たとおりである。

シャルルは、自分の助言により、自分のために行われたこの遠征で、海難で岸に漂着した物はその土地の領主のものになるという『漂着物取得権 *droit de bris*』を盾に、嵐で難破しカラブリア〔訳注・イタリア半島の最南端〕の岩礁に流れ着いた十字軍士たちの遺骸・武器・衣服・物資を拾得したが、同じやり方で彼は、『神聖ローマ帝国』と『ローマ教会』という大きな難船をも自分のものにしたのであった。クレメンス四世（在位1265-1268）のあと、ほぼ三年間、彼は次の法王の選出を許さず〔訳注・次のグレゴリウス十世の在位は一二七一年から一二七六年までである〕、自分がイタリアで法王権力を行使した。生前のクレメンスから金貨二万枚と引き換えに、両シチリアだけでなく全イタリアを手に入れた上、ローマの元老院議員とトスカーナにおける帝国代理人に任命しても

らっていた。ピアチェンツァ、クレモナ、バルマ、モデナ、フェラーラ、レッジオ、少し遅れてミラノまでも、彼を領主として受け入れた。ピエモンテ、ロマーニャ〔訳注・ラヴェンナを首都とする法王領〕の多くの都市、そしてトスカナ全体も同様にした。フィレンツェのグェルフ党員が、捕らえたギベリーニ党員の処置について指示を求めたのに対して、彼は平然と「みんな殺してしまえ！」と命じている。

しかし、イタリアは彼にとっては小さすぎた。彼はシチリアのシラクサからアフリカを、南イタリアのオトラントからギリシア帝国〔訳注・ビザンティン帝国〕を監視し、コンスタンティノープルのラテン帝国帝位継承者で「帝国なき皇帝」であったフィリポスに自分の娘を嫁がせた。〔訳注・ビザンティン帝国は一二〇四年に十字軍によって滅ぼされたあと、ラテン帝国とニケーア帝国に分裂したが、一二六一年、パライオロゴス王朝により一つの帝国に復活していた。〕

法王たちはシュヴァーベン家（ドイツ皇帝）に対する自分たちの悲しい勝利を後悔していた。その復讐を担う者とその息子たちは、法王たちのもとで育てられており、法王にしてみれば、この身近にある恐怖からどのようにして逃れるかが重要であったが、その一方では、フランスが振るう抗いがたい力、邪悪な吸引力を恐怖をもって感じていた。そこでグレゴリウス十世（在位1271-1276）は、イタリアをしつかり自分に結びつけておくため、先輩の法王たちが念入りに育成してきた過激分子を和らげようと《グェルフ党》《ギベリーニ党》の呼称を捨てさせようとした。また、歴代法王にとって宿敵であったドイツの神聖ローマ皇帝とコンスタンティノープル皇帝たちとも融

和する道を探った。ギリシア教会との和解を宣言するとともに、神聖ローマ皇帝については、選帝侯たちに安心感を抱かせるような、禿頭で凡庸な風貌の一介の騎士を任命して「空位時代」を終わらせることに成功した。この貧相な皇帝こそ、ハプスブルク家のルードルフで、のちの法王たちは、このオーストリア王家をフランス王家に対抗する存在として利用していくこととなる。

グレゴリウス十世のもくろみは、この新しい皇帝と力を合わせてヨーロッパの再度の十字軍熱を誘導し、帝権と教皇権を再興することであった。それに対し、ローマ人でオルシーニ家出身のニコラウス三世（在位1277-1280）がめざしたのは、自分の一族にとつて都合のよい王国をイタリアの中心部に打ち立てることであった。彼は、ルードルフがボヘミア王（オタカル二世）に勝利したチャンスをつえ、ルードルフを利用してシャルル・ダンジューに圧力を加えた。コンスタンティノーブルのことで頭がいっぱいになっていたナポリ王（シャルル）はローマ元老院議員と皇帝代理という称号を手放した。その間にニコラウスはシャルル打倒のための同盟を、アラゴン及びギリシア人たちと結んだ。陰謀は内外にわたって張り巡らされた。イタリア人たちはこのジャンルの仕事が好きで、いつも陰謀を企てた。成功することは滅多になかったが、この芸術好きな民族にとつて「企み」は、悲劇的な現実のなかにあつて楽しみをもたらしてくれる一種の芸術活動であった。このドラマには、たくさんの観衆と荘厳な場面、人を驚かせる騒ぎが必要であった。舞台に選ばれたのはしばしば聖堂で、これはドラマを盛り上げるのに欠かせない要素であった。

ここに述べる陰謀は、げんこつを食らわしたとか男を殺して仕返しに殺されるといった、パッ

ツイ家〔訳注・フィレンツェの名門で、メディチ家と争って敗れた〕やオリアーティ家の陰謀などとは全く別のそれで、シチリアと世界を動かし、同盟を糾合して督励し、蜂起させ、民族と民族の戦争を仕組むもので、それには、外国勢力をいかに排除するかなど、大きな困難も伴った。このようなことを構想し、最後までやりとげるには冷徹で強靱な頭脳が必要であるが、そうした条件を備えていたのが、カラブリア人で医師であったプロチダであった。彼はフリードリヒ二世（シユヴァーベンの）の宮廷に仕えた貴族で、その名はプロチダ島〔訳注・ナポリ湾の入り口にある〕の領主であったことによる。フリードリヒ二世やマンフレートのような「十三世紀の自由思想家」の気に入られるためには、医者かアラブ人かユダヤ人かなくてはならなかった。こうした君主の宮廷へは、教会經由よりサレルノの学校〔訳注・ナポリの南方にあり、アラブ世界から伝えられた学問を教えたことで有名〕經由で入るのが常であった。この学校は、レオナン体の詩句で今日に伝えられている「穢れなき書〔*innocent prescriptions*〕」だけにとどまらない何かを教えてくれた。〔訳注・レオナン体とは十二世紀バリの詩人、レオンLeonに由来する呼称で、各行の中間と終わりの語または音節に押韻した形式をいう。〕

フリードリヒ二世が亡くなり、その息子マンフレートも死んだ（シャルル・ダンジュに敗れた）あと、プロチダはイスパニアへ逃れた。当時のイスパニアの多様な王国の状況がどのようなものであったかを調べると、彼がフランス王家に対抗する勢力としてイスパニアに期待した理由が明らかになる。

まずナヴァール(ナヴァアラ王国)は、小国ながら、イベリア半島のほぼ全域がイスラム化した時期もキリスト教に踏みとどまった地域であるが、フランス王フィリップ三世の支配下に組み込まれる以前の最後の王は、新興キリスト教国として勢力を拡大していた西隣のカステイリヤに対抗するため、当初はイスラム教徒のムーア人に、のちにフランスに支援を求めた。このナヴァール王の甥、シャンパーニュ伯アンリは、男児の跡継ぎがなく、死に際し、一人娘ジャンヌをフィリップ三世に託した。フィリップ三世は、彼女を息子〔訳注・のちのフィリップ四世〕に妻として与えた。このときフィリップ三世は、イスパニア〔訳注・ミシユレは「イスパニア」と表現しているが、当時は、南半分がイスラム教徒の地域で、北半分はレオン、カステイリヤ、アラゴンのキリスト教王国が並立していたイベリア半島のこと〕にすぐ近いトゥールーズ伯領を相続したばかりであった。ここからピレネーを越えて峠を降るとパンプローナの町に着き、そこからナヴァール王国の中心のブルゴスに向かうことができた。

しかし、イスパニアを手に入れることが容易でないことは、経験からも明白であった。イスパニアは戸締まりはよくなかったが、入ってからが大変であった。カステイリヤはルイ八世に嫁し聖王ルイ九世を生んだブランシユ・ド・カステイユ(1188-1252)のふるさとであり、老王アルフォンソ十世は、母親によって血が繋がっている聖ルイ王の長男フィリップ三世の息子たちに自分の王国を委ねるつもりであったが、うまくいかなかった。アルフォンソはイスパニア人としてもキリスト教徒としても、民衆の間で評判がよくなかった。彼は、博識であったが、錬金術と占星術とい

う怪しげな学問に傾倒し、いつもユダヤ人の学者と部屋のなかに閉じこもっていた。贖金を造ったり、ローマ法とゴート法を混ぜた偽の法律を作ったり、さらには、イスパニアが好きでなく、ドイツ皇帝の座に偏執をもっていた。

イスパニアはそんな彼に見事に仕返しした。カステイリヤ人たちは、ゴート法に従って、アルフォンソの第二子、この時代の「エル・シド^レ・ウエラ」といべきサンチヨを王に戴いた。このサンチヨ四世は、父からは勘当され、フランス人とムーア人から同時に脅かされ、そのうえ、近親結婚ということで法王により破門されながら、すべてに敢然と立ち向かい、妻と王国を守った〔訳注・このため「勇士 le Brave」と渾名^やられた〕。フランス王（フィリップ三世）は、大軍を集め、サン＝ドニの旗を掲げてイスパニアに侵入したものの、サルヴァティエラ〔訳注・ピレネー山地をスペイン側に降りてすぐのところにある〕で兵糧が尽きて、それ以上進めなくなっている。

当時は、イスパニア全体にとって栄光の時代であった。アラゴン王ドン・ハイメ（ハイメ一世）はトゥールーズ伯を守ってミュレ〔訳注・トゥールーズのすぐ南〕で亡くなったトゥルバドゥール王（ペドロ二世）の息子で、マヨルカおよびヴァレンシアの王国をムーア人から奪った。イスパニア式の大袈裟な言い方によると、三十三の戦いに勝利し、二千の教会堂を建立ないし奪還した。しかし、彼は、この教会堂の数を上回る妾をかこっていたと言われ、先代の王たちが約束した法王への貢ぎ物を拒み、息子のドン・ペドロをシュヴァアーベン家の最後の末裔であるマンフレートの娘と結婚させた。

歴代アラゴン王は、相手がムーア人だろうとキリスト教徒だろうと構わず戦いを仕掛け、臣下たちから愛される必要があったし、また、愛された。勇敢な兵士であり繊細な歴史家であったラモン・ムンタネールが書いたものを読むと、彼らは裁きにおける公正に疑義を生じさせないため、臣下たちから招待を受けたときも、提供された果物やワインそのほかの御馳走をみんなの前で堂々と飲み食いしたという。しかし、ムンタネールが忘れていることが一つある。それは、これらの王たちが人々から好かれたのは、誠実さによってではなく、敵味方おかまいなく略奪する半ばムーア的なアラゴン山岳民、アルモガヴァル人の悪賢さによってであったことである。

シュヴァーベン家の忠実な召使い（プロチダ）は、若いペドロ三世王のもとに身を寄せた。そこには、シュヴァーベン家から嫁いだ王妃コンスタンツァがいた。アラゴン王は快く彼を迎え入れ、土地と館を与えたが、フランス王家との対戦を勧める助言は冷静に受け止めた。力の差があまりにも大きく、互角に戦うには、キリスト教世界全体が力を合わせる必要があった。ペドロ王は、時を待つことにし、跳ね上がり連中が行動に逸つても力を貸すことはせず、共謀の疑いをかけられないよう慎重に配慮した。結局、プロチダはイスパニアにある自分の資産を売り払って姿を消した。

このとき、彼はフランシスコ会士に扮装して去っていったという。フランシスコ会士は、どこにでもいたから最も目立たず、食べ物乞うても快く迎えられる。彼らは知性と雄弁にすぐれ、メッセンジャー、説教師、ときには外交官として、さまざまな世俗的役目——こんにちでいうと、郵便物と新聞の役割を果たした。プロチダは、シャルル・ダンジューと戦ってくれる同志を求めて、托

鉢修道士の汚いローブを身にまとい、裸足で旅した。

シャルル・ダンジューへの憎しみを抱く人は、いたるところ、幾らでもいた。むずかしいのは、彼らを糾合して団結させ、好機をとらえて決起させることであつた。彼がまずシチリアに向かつてのは、革命の火山を間近に見て、その音を聴き、観察するためであつた。爆発が近いという兆候は幾つも現れていた。内にこもつた憤激、ひそかな泡立ち、不満の声、そして沈黙……。シャルル・ダンジューの圧政は、この不幸な民衆を疲弊のどん底に追い込んでいた。つぎにプロチダは、シャルルの脅威を感じていたコンスタンティノープルに渡り、パライオロゴス帝に会つた。

——すでにナポリ王（シャルル・ダンジュー）は三千人の兵士をドウラツツォに派遣し、自らも百隻のガレー船と五百隻の輸送船を率いて出発の準備をしている。この遠征の成功は確実である。というのは、ヴェネツィアがこれに協力し、ドージェ（doge）のジョヴァンニ・ダンドロ自ら四十隻のガレー船を率いて遠征に加わる準備をしているからで、第四回十字軍〔訳注・一二〇四年、コンスタンティノープルを陥落させた〕が再現されようとしている。——

この情報に、パライオロゴスは激しく動揺し、なすべき術を知らなかつた。

「どうしたらよいか、ですって？　もしわたしにカネをくだされば、陛下のために、カネはないが武器をもつていて、守つてくれる人間を見つけましょう。」

プロチダは、パライオロゴス帝の秘書の一人を連れてシチリアへ行き、彼をシチリアの豪族たちや、このときソリアーノ城に隠れ住んでいたローマ法王（ニコラウス三世）に引き合わせた。ギリシア皇帝は、成立したばかりの和解に関し法王の署名を何よりほしがっていた。しかし、法王ニコラウスは事件に関わるのをためらった。別の説によると、ローマ人でオルシーニ家出身のこの法王には、シャルル・ダンジューのある言葉を思い起こさせるだけで躊躇させるに充分だったという。それは、法王が自分の姪をシャルル・ダンジューに嫁がせたがっていることを聞いたときにシャルルが言った「彼が赤い靴下をはいているからといって、オルシーニ家の血がフランスの血と混じり合うことが可能だなどと思っているのだろうか？」との一言であった。

ニコラウスはギリシア皇帝との和解協定に署名してまもなく亡くなった（1206）。敵対勢力の試みはことごとく挫折し、シャルル・ダンジューの立場は、かつてないほど強くなったように見えた。彼は、ギベリーニ派の枢機卿を追い出して法王選挙を行わせ、フランス王家の傀儡であるトゥールの年老いた修道士をマルティヌス四世として指名させた。これはシャルル自らが法王になったようなもので、彼は全ての教皇領に守備隊を配置し、法王をヴェイテルボ（訳注・ローマの北方）に移し、監視した。シチリア人たちがナポリ王に関して法王にとりなしを求めてやってきても、法王のそばに当の王がいるのでは、裁きを行う側に敵がいるのと同じであった。事実、直訴をするために派遣された一人の司教と修道士は、返事をもらえない代わりに、地下牢に放り込まれてしまった。

その点、シチリアはシャルルからなんらの哀れみも期待してはいなかった。この島は半ばアラブ

で、アラブの友人であったマンフレートとその一族に強い親近感を抱いていた。勝者たちがシチリア人民に対して加えた全ての侮辱は、彼らには報復としか見えなかった。このプロヴァンス生まれの人物の血の気の多さは周知のとおりであるが、そこにあるのが征服者としての傲慢と民族的反感だけだったら、不幸は次第に弱まっていく可能性もあったであろう。しかし、ここでは、それに不器用な行政と徴税制が持ち込まれ、質朴な「オデュッセイとアエネイスの世界」に苛烈な財政政策が押しつけられ、日々、人々への圧迫の度を増していた。

この農耕と牧羊の民は、古代の昔からつぎつぎ代わる支配者のもとで、特有の独立精神のなにかを守ってきた。これまでは、山地では孤高、荒地地では自由といったものが保たれてきたのが、いまや、鳥じゅうに奇妙な訪問者がやってきて、谷間の土地から人跡未踏の岩山の頂にいたるまで測量し、収税吏は山の上の栗の木の下や火山岩と雪の間の岩の庇のところに机を据えて、山羊飼いの名前まで帳面に記入しはじめた。この事態に対するシチリアの嘆き声を聞き分けるには、森を通ってほとばしる急流のように破格用法 (*barbarismes*) と破格語法 (*solecismes*) を駆使してまくしたてるネオカストロのバルテレミの雄弁に耳を傾ける必要がある。

「森を差し押しささるるだの、船を岸に繋ぐなといった信じがたいような彼の思いつきや、羊の群の収益についての誇張した値踏みについては、なんと言ったらよいだろうか? ……彼は新しく銀貨を鑄造して、一ドニエにつき三〇ドニエをシチリア人たちに支払わせようとした。われわれが戴いた

王は、教父たちの父だと思っていたが、実は《アンチ・クリスト》だったのだ。」

別の一人は、こう述べている。

「一年の終わりには、家畜の群と生まれた子羊などを見せなければならなかった。貧しい農民たちは嘆き声をあげ、牛や羊を飼っている人々は恐怖に囚われた。風にのって分封した蜜蜂の巣にまで税がかけられた。狩りの取り締まりは厳しく、小屋のなかに鹿の皮を隠してあるのが露見すると罰金を取られた。王を喜ばせるために盛んに新しい貨幣が鑄造されると、ラッパが鳴らされて市民は古い銀貨を吐き出し、交換しなければならなかった。」

入れ替わり立ち替わりやってくる外国の主人によって乳と血を搾り取られる牝牛——これが大昔からのシチリアの運命なのである。シチリアの人々は、ディオニュシオス一族〔訳注・前四世紀のギリシア人支配者〕、ゲロン〔訳注・前五世紀の僭主〕といった暴君のもとで隷従と厳しい生活を強いられてきた。シチリアが外の世界から恐れられたことがあったとしても、それはこうした暴君のせいであり、民衆自身はつねに奴隷であった。

まず、アテナイとシュラクサイ、ギリシアとカルタゴ、カルタゴとローマの戦争、そして奴隷戦争といった古代世界における大戦争のいずれも、決戦の場になったのはシチリアであった。これら

の人類史上の「大戦争」は、すべて、あたかも祭壇の前で神の裁きを仰ぐように、エトナ山の麓で戦われた。

そのあと、ゲルマン蛮族、アラブ人、ノルマンディー人、ドイツ人が次々とやってきた。そのたびに、シチリアは期待と熱望を裏切られ、エトナ山の下敷きにされた巨人エンケラドスのようにもがき苦しんだ。二十もの民族から成る住民同士の癒しがたい亀裂のうえに、歴史と風土が形成した運命が二重に重くのしかかってきた。ファルカンドス（訳注・十二世紀の歴史家）がその歴史書の冒頭に記している美しくも気だるげな嘆きのなかには、そのすべてが見事に表れている。

「いまわたしが願うことは、きびしい冬が去り、より暖かい風のもとに、春の始まりを告げるような好ましい何かをあなた方に書き送れることである。だが、悲痛な報せが次の嵐の到来を予感させている。わたしの歌は涙に代わられようとしている。空の虚ろな微笑み、田園や森の忙しない喜び、鳥たちの合唱が、ふっとわたしを我に返らせる。わたしは、この愛する母なるシチリアを覆っている荒廃を涙なくして見ることはできない。とりわけサラセン人たちへの抑圧は言語に絶する。

……おお、キリスト教徒とサラセン人が協調して一人の王を選んだなら！ 島の東部、エトナ山の火と溶岩の間で戦っているシチリアの盗賊たちと蛮族どもとが発しているのは、火と火打ち石のようなものだ。しかし、シチリアの内陸部、美しいパレルモの地が呈している野蛮な様相は無慚ともなんともいいようがない。わたしは、新しがり屋のアプーリア人には何も期待しないが、力強く高

貴な都市メツシーナなら、自分の身を守るだけでなく、外国人どもを海峡の向こうへ押し戻してくれるであろうか。カタールニアは、戦争、ペスト、エトナの熔岩流、地震と度重な災厄のために、運命に立ち向かうことはとうていできなかつた。汝に遺されていたのは従うことだけであつた。平和を救ふことのできるのは、シラクサだ。汝こそ、その雄弁をもつて同胞の勇気を掻き立てるべきだ。暴君ディオニュシオスから我が身を解放することに努めよ。ああ、誰が我々を暴君に立ち向かわせるのだろうか！ シチリアの冠たるパレルモは、なぜ黙っているのか？」

〔訳注・ファルカンドスの文章は、ギボンの『ローマ帝国衰亡史』第十卷にも引用されている。ここに引用されたのと共通するところもあるが、少し違っている。〕

ファルカンドスがパレルモについて並べ立てることができるのは、その悦楽的な都市と宮殿の壮麗さ、港や庭園のすばらしさ、絹を吐き出すカイコの不思議さ、オレンジやレモン、サトウキビといった特産品ばかりである。現実を忘れて、果物と花に埋もれたこの町が発するのは、ギリシアの田園恋愛詩の官能的でメランコリックな響きのみである。

「わたしは洞窟の下で、シチリアの海辺へ草を食みに出かける羊の群を見ながらおまえを抱き締めつつ歌おう。」〔訳注・前五世紀前半のシユラクサイ生まれの詩人、テオクリトスの詩〕

それは、一二八二年三月三十日、復活祭の月曜日のことであつた。シチリアはすでに湿っぽい熱気に覆われ、フランスでいえば『聖ヨハネの日』〔訳注・六月二十四日の夏至〕のようであつた。この国の復活祭は、禁欲の四旬節や小斎日といった、神が主役を演じられる時は終わり、気だるい官能が主舞台に躍り出てくる季節である。その変化は突如として起きる。花々は一斉に地面から噴き出し、美を競い合う。それは生の凱歌、自然の復活、官能の復権である。

したがって、この復活祭の月曜日には、あらゆる善男善女が晩禱に参加するためにパレルモから美しい丘を越えてモンレアーレ〔訳注・パレルモの南西。少し内陸に入ったところ〕へ登ってくるのが慣わしであつた。この祭りを荒らしてやろうと外国人たちもやってきたが、あまりにも大勢の人が集まるので、そうした連中のことを気にしているゆとりはなかつた。副王（太守）は人々に武器の携行を禁じていたが、これはいつものことであつた。多分、彼は貴族たちについてはチェックしていた。プロチダは彼らにパレルモに集まるよう指示していたが、行動を起こすには、きつかけが必要であつた。その期待以上のきつかけを与えたのがドルーエという一人のフランス人であつた。

彼は、教会へ詣でに行こうとしていた土地の貴族の一家を呼び止め、取り調べはじめた。この一行のなかには美しい娘とそのフィアンセがおり、ドルーエはフィアンセの男を調べ、武器をもつていないことを確認したあと、こんどは娘が衣の下に隠していないかと疑い、衣服のなかに手をつ突っ込んで調べようとしたので、娘は気絶した。怒った男たちは「フランス人どもを殺せ！」と叫びながらドルーエに襲いかかり、奪い取つた彼の剣で殺した。それを機に、いたるところでフランス人



……娘が衣の下に隠していないかと疑い、衣服のなかに手を突っ込んで調べようとした……

が襲われ、のどを掻き切られた。フランス人の家には、前もって印がつけられていたとも言われる。そして、シチリア式の「c」「ch」の発音ができない者は片っ端から殺された。フランス人の子を身ごもっているシチリア女性も情け容赦なく腹を切り裂かれて殺された。

他の都市がパレルモに倣うには丸一か月が必要であった。この反フランスの動きにかかった圧力は不均等であった。シチリア人民のなかには、気まぐれな寛大さがあればある。パレルモにおいてさえ、自邸にいるところを不意に襲われた副王は、侮辱は受けたが、命を奪われることはなく、南フランスのエーグモルトへ送り返されただけで済んだ。カラタフィミ〔訳注・シチリア島西部〕の支配者も、誠実な人柄だったので、住民たちは彼を家族全員とともに島外へ退去させている。こうした措置には、シャルル・ダンジューの報復への恐れも多分にあつたかもしれない。熱しやすく冷めやすい南方人らしく、すでに人々の熱気は冷め、気力も萎えかけていたのかもしれない。

パレルモの住民たちは、法王に赦しを乞うため二人の修道士を派遣した。この使節は、「*Agnus Dei, qui tollis peccata mundi, miserere nobis*」〔訳注・「汝世界の罪を取り去る神の子羊よ、我らを憐れみたまえ」との意〕という連禱の言葉以外は何も言おうとしなかった。彼らが、この言葉を三度繰り返すと、法王もまた、「*Ave, rex Iudaeorum, et dabant ei alapan*」〔訳注・「ユダヤ人の王、安かれ」として、唾し頭を叩く〕というキリスト受難の唱句を三度唱えて答えている。

メッシーナもシャルル・ダンジューからよい感触を得ることができなかった。彼は、メッシーナからの使者に、彼らは皆教会と王権への裏切り者であると答え、せいぜい防衛に努めるがよからう

と突き放した。メッシーナの人々は、恐怖に陥って防衛の準備を急いだ。男も女も子供も全員が石を運び、三日間で城壁を築き、勇敢に第一回の襲撃を跳ね返した。それについて、一つの歌が遺されている。

「ああ、メッシーナの女たちが髪を振り乱して石と石灰を運んでいるのを見るのは、なんと哀れなことか！　メッシーナを痛めつけようと望むのは誰か？　この労苦と労作業は神の思し召しである。」

しかし、そこに登場するのがアラゴン王のドン・ペドロである。この策謀に長けた君主は、はじめはシチリア人たちとは距離を置いて、情勢を見守っていた。フランス人虐殺に手を染め、のっぴきならない状況になったシチリア人たちが、これからどうしていくのか？　——これがドン・ペドロが知っていたことであった。彼は一軍を率いてアフリカでイスラム教徒に対する戦いを続けていた。これは、彼の軍事行動を不安がっているフランス王や法王に対し、ムーア人に対する戦争であると言いつつ諷刺するためであったが、さらに安心させるために、フランス王とシャルル・ダンジュールから借金までしている。彼の部下たちが封印された命令書をはじめ開いたのは、海上に出たからであったが、そこには、アフリカの戦いのことしか書かれていなかった。実際、彼が目標をシチリアに定めたのは、何か月も経ってシチリアから二つの使節団が来てからであった。

アラゴン王はメッシーナを攻撃しようとしているシャルル・ダンジューに挑戦状を送ったが、この強敵との対戦を急ごうとはせず、あたかも、牡牛の巨体を巧みに躲しながら剣を振るう敏腕の闘牛士のように、まずは、この都市の救援のために山岳民アルモガヴァルを何人か送るにとどめた。身軽で敏捷な彼らは、パレルモからメッシーナの間〔訳注・ほぼ二〇キロ〕を三日間に六往復した。ずっと効き目のある支援をしたのは、カラブリア人ルツジェロ・デイ・ロリア率いるカタルーニヤ船団であった。彼らはシチリアとイタリヤ半島の間の海峡を制圧してシャルル・ダンジュー軍の兵糧を絶つとともに退路を塞ぐはずであった。自分の海軍力を客観的にわきまえ敵を警戒していたナポリ王（シャルル）は、テントも物資もそのままにして夜間に海峡を渡りイタリヤ本土へ引き揚げた。メッシーナの人々は、夜が明けてはじめて敵がいなくなっているのを知ったほどであった。ムンタネールの記録によると、シャルル・ダンジュー軍の九十隻に対し、カタルーニヤ人のガレー船は二十二隻に過ぎなかった。しかし、シャルル側の九十隻には、真つ先に逃げ出したピサの十隻と、それにつづいて逃げたジェノヴァの十五隻も含まれており、シャルルの臣下であるプロヴァンス人たちが有していたのは二十隻であった。残りの四十五隻はナポリとカラブリアの船で、これも形勢不利と知ると、逃げ帰ってしまった。カタルーニヤ人たちは、この敗走する連中を追いかけて、六千の兵を捕らえて殺し、その後、夜明けごろにメッシーナの港に集まってきた。

「夜が明けたとき、町の人々は、かくも多くの船を見て、叫んだ。『ああ、神よ。なんたること

か！アラゴン王のガレー船に敗れたシャルルの艦隊が戻ってきているとは！」。王は起きていた。というのは、彼は、夏も冬も、日の出とともに起きるのが常であつたからである。彼は騒ぎを耳にすると、『この騒ぎは何事じゃ？』と尋ねた。『陛下。シャルル王の艦隊が戻ってきて、わがガレー船隊を捕らえているのでございます』。王は、馬を曳いてくるよう命じ、十人足らずの家来をつれて宮殿から出かけた。そして海岸沿いに走つたが、そこで出会つた男や女、子供たちは絶望に打ちひしがれていた。王は『なにも心配することはない。わが方の船隊がシャルル王の艦隊を捕らえてきたのじゃ』といつて励ました。この言葉を繰り返し叫びながら海岸を走る一行に人々は『神のお望みが、そうでありますように！』と叫んだ。メッシーナの全ての男女子供たちまでが彼のあとについて走つた。メッシーナの軍隊も従つた。こうして《金の泉》に着いたとき、王は、帆一杯に風を受けて近づいてくる船を見て、心のなかでつぶやいた。『わたしをここへ導いてくださった神よ、わたしとこの不幸な人々を見捨てないでください。御恩は必ずお返ししますから！』

「この間に一隻の軍船が王のいるところをめざして近づいてきた。この船はアラゴン王の旗を掲げ、船上にはエン・コルターダが乗つていた。翻つているのがアラゴン王の旗であることに気づいた人々は喜びのあまり躍り上がった。やがて接岸した船からエン・コルターダが上陸し、王にこう述べた。『陛下。陛下の敵どもの船を連行してまいりました。ニコテラ（訳注・イタリア半島南端のジョイア湾の近くにある町）は攻略され、焼かれ、破壊されて、フランス側は二百人以上の騎士を失

いました』。この言葉を聞いて、王は馬から降りて跪いた。みんなもそれに倣い、全員で『サルヴェ・レジーナ *Salve regina*』〔訳注・「めでたし、天后」の意で、聖母を讃える祈り〕を唱えて、勝利をもたらしてくださった神に感謝を捧げた。そのあと、王はエン・コルターダに『よくぞ来られた』と言葉をかけ、税関事務所のように集まっている人々にも、この朗報を伝えるよう指示した。それから、二十二隻のガレー船を先頭に、それぞれがガレー船、小舟、荷船を引っ張って港に入ってきたので、メッシーナ港は、敵味方の旗を掲げた船でいっぱいになった。これほどの歓喜に満ちた光景はいまだかつてなかった。この喜びのなかで天と地が一つに溶け合い、神と聖母と天上の宮居を称える賛歌が轟きわたった。王宮の前にあつた税関事務所のところでも歓喜の声が響きわたった。それは、対岸のカラブリアにまで聞こえたほどであった。」

シャルル・ダンジューは、自分の艦隊の惨めな敗北をイタリアの岸から見ていた。コンスタンティノープルを征服するために建造したばかりの艦隊が、敵の手に渡り、あるいは眼前で炎上していくのを、救うこともできず、ただ眺めているほかなかつた彼は、怒りのあまり、手にしていた王笏に噛みつき、「ああ、神がわたしをこのような不運な目に遭わせ、落ちていくのをお喜びになるとは！」と繰り返したという。

しかし、この諦めも、たちまち高慢ぶりに取って替わられた。シャルル・ダンジューは、すでに年を取り、身体の動きも鈍重になっていたが、若いアラゴン王に対し、双方から百人の騎士を出し、

その立ち会いのもとに一騎打ちで勝負を決したいと申し入れた。アラゴン王がこの提案を受け入れたので、二人はイギリス王立ち会いのもと一二八三年五月十五日にボルドーで相まみえることになった。（訳注・このとき、シャルルは一二二六年生まれであるから五十六歳、ペドロは一二三九年生まれであるから四十三歳である。イギリス王はエドワード一世である。）

指定された日、良馬をもっていたドン・ペドロは、夜の間、ピレネーのあらゆる道と峠を知り尽くしている馬商人に案内されて、三番目に（シャルル・ダンジュー、イギリス王につづいて）ボルドーに着いた。到着したのは試合の当日であったが、立会人に向かつて、フランス王（訳注・シャルル・ダンジューの甥、フィリップ三世）が部隊をつれてボルドーの近くにいるので、自分の身の安全が保証されていないと抗議し、立会人がそのことを文書に認めている間に、ペドロ王は試合場を一巡し、自分の馬に拍車を入れると、そのままアラゴンに通じる道を百マイルあまり、止まることなく走ったのであった。

シャルル・ダンジューはプロヴァンスで新しい軍勢を整えた。しかし、ナポリは、彼が帰還するより前に、ルτζジェロ・デイ・ロリア提督によつて手痛い打撃を蒙っていた。ルτζジェロは四十五隻のガレー船にナポリ湾入口を遊弋させ、シャルル・ダンジューの息子のシャルル・ル・ボワトゥー（訳注・「びっこ」の意味）を挑発させた。若い公子とその取巻きの騎士たちは、このような侮辱に我慢できず、港に擁していた三十五隻のガレー船を伴つて出撃した。

しかし、彼らは最初の衝突で敗れ、捕捉された。シャルル・ダンジューが帰り着いたのは、その翌日で、彼は息子が捕らえられたことを聞いたとき、「彼は死ななかつたのか！」と叫んだという。怒り狂ったシャルルは、溜飲を下げるために百五十人のナポリ市民を縛り首にしたが、この事件は彼にとつて最後の手厳しい衝撃となつた。彼は、すっかり生気を失い、その夏は、法王の仲介でシチリア人との和解交渉に費やした。冬になって再び遠征の準備を始めたが、もはや役には立たなかつた。最後の希望とともに命が彼のもとを去つてしまつたからである。彼は、自分がシチリア王国を征服したのはローマ教会のためであつたというある聖人の証言を得て、恩寵の安心とともに息を引き取つた（一二八五年一月七日）。

その間に、その出自からも心情的にも全くフランスに肩入れしていた法王（マルティヌス四世）は、ドン・ペドロのアラゴン王座喪失を宣言し（一二八三年）、ドン・ペドロを討伐する者には十字軍としての贖罪を与えると約束していた。ドン・ペドロ当人は、翌年、フランス王フィリップ三世豪胆王の第二子でフィリップ四世美男王の弟、シャルル・ド・ヴァロワに王国を譲つたが、それでも、アラゴンを血祭りに上げるための《十字軍》は行われた。

フランスにとつて戦争は久しぶりのことで、みんなが十字軍への参加を希望し、王妃自身や多くの貴婦人たちまで十字軍士になつたが、この《十字軍》は、フランス国外へ出た軍勢としては、ゴドフロワ・ド・ブイヨン〔訳注・第一次十字軍を率いた〕以来最大規模となつた。イタリア人たちも騎兵二万、歩兵四千を送つた。ジェノヴァ、マルセイユ、エーグモルト、ナルボンヌの

艦隊がカタルーニヤの海岸を遊弋し、陸上軍を補佐した。すべてが成功を約束していた。ドン・ペドロはカステイリヤ王や自身の弟のマヨルカ王といった同盟者からも見放された。臣下たちも都市同盟を編成して彼に反旗を翻した。彼は、山岳民アルモガヴァル人のもとに身を寄せ、彼らと難攻不落の砦に拠って敵の動きを見守った。

エルナ〔訳注・ペルピニヤンの南にある町〕は《十字軍》に抵抗したため全員が無残に殺された。ヘローナ〔訳注・バルセロナの東北九十キロ、ペルピニヤンの南西六十キロ〕はさらに頑強に抵抗した。攻撃に手間取っている間に気候条件はフランス軍にとって次第に悪くなり、軍隊のなかに熱病が流行した。海軍もルッジェロ・デイ・ロリア提督率いるアラゴン海軍が勝利した。フランス人たちは退却を考えるべきであったが、すでに全軍が病気にやられていた。兵士たちは、聖人たちの墓所を荒らしたための罰だということから恐怖に囚われた。にっちもさっちもゆかなくなっていた。

山岳民のアルモガヴァル人たちは、獲物に引き寄せられて、ますます数を増やしていた。フランス王フィリップ三世は瀕死の状態で担架に載せられ、しおれた騎士たちに囲まれて帰路についた。そのうえに滝のような雨が降り注ぎ、多くの兵士が病に倒れた。王は、辛うじてペルピニヤンに帰り着いたものの、そこで亡くなり、フランスはイスパニアに有していた土地をすべて失った。〔訳注・アラゴン王ペドロ三世も、同じ二二八五年に死去している。〕

新王フィリップ四世〔訳注・渾名は「ル・ベル・ボ」で端麗、美男の意〕は、カステイリヤ王を動

かしてアラゴンに与する者たちに対抗させる方策を採用した。シャルル・ダンジュエーの息子で捕虜になっていた「びつこのシャルル」は偽誓によって自由の身になった。シチリアとその新しい王であるアラゴン王家の第二子たちは、長子の家門から切り捨てられ、両者の間には戦争まで起きる。しかし、シャルル・ダンジュエーの孫であり「びつこのシャルル」の息子は、かつて父親が捕らえられたのと同じく、シチリア人たちによって捕らえられた。一二九九年、一つの条約が結ばれ、フェデリーコ王〔訳注：ここでいうのはドン・ペドロの弟のフェデリーコ〕が、その存命中、この島を保持することになった。とはいえ、その後も、一世紀以上にわたって、この島はフェデリーコの子孫が領有することとなる。

ナポリ王国は完全には覆されなかったが、少なくとも痛手を蒙り、屈辱を味わった。死者たちのためには幾つかの償いがなされた。一三〇〇年ごろに亡くなったある年代記者（フェララーのリコバルド）は「いま、この島を治めている敬虔なシャルル（びつこのシャルル）は、コンラディンおよび彼とともに亡くなった人々の墓の上にカルメル会の教会を建立した」と述べている。

第二章　ファイリップ美男王と法王ボニファティウス八世

「私のはかの地（フランス）ではウーゴ・チャベッタ（ユーク・カペー）と呼ばれていた。

そして私から多くのファイリップ（ファイリップ）とルイジ（ルイ）が生まれ、近世のフランスを支配したのだ。

私はパリの一人の牛肉屋の子供だったが、

灰色の衣服をまとった一人を除いては、

古い王たちがことごとく亡くなった時、

私の手の中に王国統治の手綱と、新たに手に入れた権勢と、多くの友人たちを

かたく握っていることに気がついたのだ。

かくして主のない王冠に対して

私の子供の頭（ロベール一世）が選ばれ、彼からはまた、

聖別された骨が始まったのである。」

(原注・ユーク・カペー自身は王冠を戴こうとしなかった。王位に就いたのは息子のロベールからである。カペーの祖がパリの肉屋だという伝承を裏づける根拠はない。「聖別された骨」とは、聖ルイ王が出ることを指している。)

「プロヴェンツァ伯〔シャルル・ダンジュー〕の得た持参金が、私の血族から

羞恥心をまだ奪わなかったころ、私の一族はいまだ

強力ではなかったが、悪事を働いてはいなかった。

その時以来、彼らは暴力と虚偽を用いて

掠奪をはじめ、その後償いとしてポンティ〔ポンティユー〕と

ノルマンディアとグアスコニヤを取ったのである。

カルロ(シャルル・ダンジュー)はイタリアへ来た、そして償いのため

クルラディーノ(コンラディン)を犠牲に供した。その後で

償いのためにトンマーズ(原注・トマス・アクィナス。シャルル・ダンジューはトマスガリヨンの宗
教会議で自分の悪行を告発することを恐れて毒殺した)を天に帰したのである。

私の子見するところによれば今後まもなく、

ある時代が来て、他のカルロ〔シャルル・ド・ヴァロワ〕をフランスから

引き出し、彼と彼の一族のことを知らせるだろう。

彼は軍隊を率いずにただ一人ジユダの試合に

用いた槍〔裏切りのこと〕一筋だけ携えてそこを出るとそれを突き出し、フィレンツェの腹を破るであろう。〕

「私にはかつて捕虜として船から出た

他のカルロ〔訳注・シャルル・ド・ヴァロワの息子のシャルル〕が自分の娘を売って、海賊が奴隷を扱うようにその値を争うのが見える。〕

「また未来と過去の罪悪を小さく見せるため

百合の花がアラニーヤ（アナニー）に入り、クリストが

その代理者の身で捕らえられるのも私には見える。

彼はふたたび嘲られ、またしても醋と胆が

新たに準備され、生きている盗賊の間で

彼が殺され給うのが私には見える……」

（ダンテ『神曲』浄罪篇第二十歌・野上素一訳）

このギベリーニ派の人〔訳注・ダンテ〕の怒りに満ちた告発には、若いけれども醜い世界に取って代わられることに対する、死にゆく古い世界の心底からの嘆きとその不条理への非難が満ちあふ

れている。この「若い世界」〔訳注・近世王制国家〕が始まるのが一三〇〇年ごろであり、その交替劇を演じた醜悪な主役こそフランスのフィリップ四世すなわちフィリップ美男王（在位1285-1314）である。

フィリップ二世オーギュスト、そしてフィリップ四世ル・ベルによって樹立されていたフランス王制は、一七九二年、ルイ十六世をもって終わるが、そこでは、死にゆくなかにも一つの慰めがあったろう。なぜなら、このときフランス王制は、小手調べにヨーロッパを打ち負かし、やがて世界を刷新しゆく若々しい共和制の巨大な栄光のなかで息を引き取ることができたからである。それに較べて、一三〇〇年のころ、法王権と騎士道と封建制の中世の息の根を止めたのは、強欲な管財人と禁治産者、そして贖金作りどもの手であり、代わって生まれた世界自体が醜悪そのものであったから、嘆きを呼び起こして当然であった。古いローマ法と帝国税制の波のなかから生まれたこの新しい世界は、生まれながらにして弁護士であり金貸しであり、ガスコーニュ人でありロンバルディア人、ユダヤ人であり、それに取って代わられ退場していった世界に較べて遙かに合法性を装っていたから、どのような眼が、たとえダンテのそのような目であっても、見破ることができただろうか？

この近代的システムの最初の代表であるフランスを最も苛立たせたのは、旧世界の恒常的な矛盾と両面性であり、あえていうなら、ローマ法と封建法という二つの原理を代わる代わる持ち出して立証しようとする露骨な偽善性である。フランスがローマ法と教会法の条文を封建的力をもって行

使用する、いわば「甲冑に身を固めた法律家」であるイタリアを（さらにいえばローマ教会を）打ち据えたのは、ローマ教会の長女として、母を正すためであった。

この聖ルイ王の孫（美男王）がとった最初の行動は、国王の高等法院と王領地においてだけでなく領主たちの裁判執行の場からも聖職者を排除し、司法権の行使を禁ずることであった。

「国王顧問会議の決定によつて、以下のごとく布告されたり。公・伯・諸侯・大司教・司教・修道院長・修道会支院長・参事会・学寮など、フランスにおいて世俗裁判の権限を有せる全ての人は、《バイイ》〔訳注・下級裁判所の裁判官〕、《ブレヴォ》〔訳注・城代〕、また裁判役人には、俗人を充てるべきであり、聖職者をこれらの役務につけるべからず。もし、すでに、これらの役務に就きたる聖職者に関しては、これを厳しく排除すべきである。さらに現下の高等法院に代わり王国裁判所において検事の任にあたる者はすべて俗人によつて構成さるべし。かくの如く布告す。

主の第一二八七年万聖節の日（十一月一日） 高等法院」

こうしてフィリップ美男王は、高等法院の全メンバーを俗人で固めた。これは、市民身分と聖職身分の分離の最初であり、より適切に言えば、市民身分の創設となった。

だが、僧侶たちもかんとんには諦めなかった。なんとか高等法院の扉を押し開け、自分たちの席を取り戻そうと試みた。そのため国王は、一二八九年、高等法院の門番であるフィリップとジャン

に対し、議長の承諾なくしては、いかなる高位の聖職者といえども院内に入れないよう厳命しなければならなかった。

こうして高等法院から異質の要素が排除されるとともに、一二九一年には、その内部でも、職務の分担と種々の機能の配分が行われた。ある人々は嘆願を受け付けて処理し、ほかのある人々は調査を担当した。トゥールーズの法院は廃止されて、ラングドックの控訴もパリで処理されることとなり、司法の中央集権化への大きな一歩が踏み出された。法律問題は、度重なる革命の痕跡を帯びた情念の土地から切り離され、より静かなパリで解決されることとなったのである。

僧侶たちを締め出した高等法院が僧侶たちと敵対するようになるのに時間はかからなかった。すでに一二八八年、裁判官〔訳注・北部と東部のフランスでは《バイイ Bailii》、南部と西部では《セネシャル seneschal》〕は、「逮捕理由を事前に報告することなく、また、逮捕令状の写しを提示することなく逮捕してはならない」、また「いかなるユダヤ人も僧侶または修道士に尋問されることがあってはならない」との国王命令が布告されている。また、カルカソンの代官に対し、「誰人であれ、宗教審問官だけの要請によって拘束することを禁ずる」との命令も出されている。おそらく、この背後には、ユダヤ人は異教徒ではあるが、王にとってはタイユ税〔訳注・いわゆる人頭税〕を納めてくれる臣下であり、たとえ宗教尋問によってであれ、横取りされるのを許すわけにはいかないとする欲得も絡んでいた。しかし、そうした動機の問題はあまり詮索しないでおこう。この王令には、宗教的寛容と公明正大さの最初の曙光が認められるからで、これに署名した人には、明らかに榮譽

が授けられてしかるべきである。

そのうえ、一二九一年には、もっと果敢な一撃が教会に対して加えられた。農奴が、直接の卑属（子供や孫）のないまま亡くなった場合、その財産は領主の所有に帰するという《マンモルト mainmort》の権利が長い間にわたって教会に吸収されつづけてきたことに対しブレイキがかけられたのである。そして、そのようにして資産を得た僧侶ないし修道士は、本来なら国家が受け取るはずであった譲渡所得税の三倍から六倍の金額を国家に納めなければならなくなった。これにより、教会に不動産が寄進された場合も、国王の懐を潤す結果になったが、このことは、王が、市民世界における新しい神として、人々の信仰心に由来する贈与を、イエス・キリスト、聖母、諸聖人たちと分かち合う仲間に入ったことを意味した。

以上は《教会》についてであるが、《封建領主》も攻撃的となった。このための武器として利用されたのが、封建制度の原理の一つである《宗主権》としての王権である。聖ルイ王の『法令集 Erablissemens』(第二書二七章)にはっきりと次のように述べている。

「Se aucun se plaint en la cour le roy de son saigneur de dete que son saigneur li doit, ou de promesses, ou de convenances que il li ait fetes, li sires n'aura mie la cour; car nus sires ne doit estre juges, ne dire droit en sa propre querelle, selonc droit escrit en Code. Ne quis in sua cause judicet, en la loi unique qui

commence Generali, el rouge, et el noir, etc.]

〔訳注・領主の債権に関し、あるいは、彼がなした約束の不履行について、誰かから王の法廷に訴えがなされた場合、当該領主は法廷に出頭しなければならない。なぜなら、いかなる領主も、成文法典による裁きに服さなければならないからである——〕との意。〕

聖ルイ王の『法令集』は、本来は王を宗主とする王領地のために作成されたものであるが、フィリップ美男王の治世にクレルモンの大法官ポーマノワールが聖ルイの息子でブルボン家の祖となるロベール・ド・クレルモンの領地のために作成した『ポーヴォワジの慣習法 Coutume de Beauvoisis』に「王は『法令集』を自分の領地のためだけでなく王国全体のために作る権利をもっている」とあるように、王国全体に適用された。

美男王の父、フィリップ三世豪胆王はすでに、封建領主の資産を平民たちが手に入れるのを容易にする道を開いていた。彼は、法律家たちに「貴族でない人々が封建領主の物を取得するのを妨げてはならない」と厳命するとともに、「貴族でない人々」が貴族に対する義務に縛られ、何をするにも、最終的に王にいたる幾つもの段階の媒介的な領主たちの合意を必要としたのに対し、合意を得る必要のある媒介的領主の数を三人にまで減らしている。

この時代の立法主義の傾向性は、十二世紀から十四世紀にいたる国王顧問たちがどのような人々

訳者あとがき

ミシュレ『フランス史』第三巻を彩っているのは、第二巻で示された中世盛期のフランスが、いまや、いかに全キリスト教世界の範としての威信を失っていったかという《滅びの美学》である。

ふり返ってみると、西暦一〇〇〇年から聖ルイ王（一二七〇年没）までの二百七十年間に、西欧では、東方世界にむかって十字軍という大規模な征服戦争が展開される一方、ロマネスクの大修道院やゴシックのカテドラルが各地に建設され、パリ大学、オックスフォード大学が創設されて、スコラ哲学が花開き、物心両面にわたって、文化が花開いた。「中世盛期」と呼ばれるゆえんがここにある。

そのすべてにおいて推進役となったのがフランス人であり、主舞台となったのがフランスであった。フランス王聖ルイは、この中世キリスト教文化の精髓を代表した指導者であった。

この建設と創造のドラマが一段落し、キリスト教的・封建的社会から世俗的・王制的世界へ、大きく軸先を転じ始めたのが、この第三巻で扱われている約百年間（一二七〇年から一三八〇年まで）である。この封建的支配体制の凋落を象徴的に表しているのが、聖王ルイの弟で、兄とは対照的に

傲慢で乱暴者であったシャルル・ダンジューの南イタリア支配を覆したシチリアの民衆の反乱であった。まさに「天下の秋」を知らせる「桐一葉」の落下の観がある。

これは、西欧社会を支配する権力が封建領主たちから王室へ移行していくのと同時に、フランスの一人勝ちからスペイン人、イギリス人へ主導権が移っていったことの表れでもあった。中世盛期の花形であったテンブル騎士団は、冷徹な法曹家と役人たちを意のままに動かすフィリップ美男王によって壊滅させられ、テンブル騎士たちは、血を分けた兄弟である封建領主たちからの助けもないまま、拷問にかけられ、斬首されていった。フランス騎士たち自身、フランドルの戦いで落とし穴にはまり、もがいているのを職人たちのハンマーでめった打ちされて無残な最期を遂げる。

中世的騎士道を教科書どおり忠実に継承し体現しようとしたフランス王ジャン二世とその騎士軍は、多くが平民から成るイギリス軍の合理的で騎士的作法など無視した野蛮な戦法により無残な敗北を喫する。運よく命永らえてイギリス貴族のもとに人質になったフランス貴族たちは、それでもなお、解放され帰国してから、律儀にも身代金を支払うためにイギリスに出かけている。その身代金自体、貴族たちの領民であるフランス農民の血と汗の結晶であった。このフランスにとって不条理きわまらない悲劇は、賢明なシャルル五世のもとで一時的にやわらぐが、まだまだ終わるにはいられない。近世的国家へのフランスの産みの苦しみは、なおも続く。

ジュール・ミシュレ (Jules Michelet)

フランス革命末期の1798年8月にパリで生まれ、父親の印刷業を手伝いながら、まだ中世の面影を色濃く残すパリで育ち勉学に励んだ。1827年、高等師範の歴史学教授。1831年、国立古文書館の部長、1838年からコレージュ・ド・フランス教授。復古的王制やナポレオン三世の帝政下、抑圧を受けながら人民を主役とする立場を貫いた。1874年2月没。

桐村泰次 (きりむら・やすじ)

1938年、京都府福知山市生まれ。1960年、東京大学文学部卒(社会学科)。欧米知識人らとの対話をまとめた『西欧との対話』のほか、『仏法と人間の生き方』等の著書、訳書にジャック・ル・ゴフ『中世西欧文明』、ピエール・グリマル『ローマ文明』、フランソワ・シャム『ギリシア文明』、『ヘレニズム文明』、ジャン・ドリュモワ『ルネサンス文明』、ヴァディム&ダニエル・エリセーエフ『日本文明』、ジャック・ル・ゴフ他『フランス文化史』、アンドレ・モロワ『ドイツ史』、ロベール・ドロール『中世ヨーロッパ生活誌』、フェルナン・ブローデル『フランスのアイデンティティ I・II』、ミシェル・ソ他『中世フランスの文化』、ジュール・ミシュレ『フランス史 [中世] I』、『フランス史 [中世] II』(以上、論創社)がある。

フランス史 [中世] III

HISTOIRE DE FRANCE: LE MOYEN AGE

2017年3月20日 初版第1刷印刷

2017年3月30日 初版第1刷発行

著者 ジュール・ミシュレ

訳者 桐村泰次

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232

振替口座 00160-1-155266

<http://www.ronso.co.jp/>

装幀 野村 浩

印刷・製本 中央精版印刷

ISBN978-4-8460-1599-2 ©2017 Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。